

# 読み方の早期教育に関するさまざまな見解

ニラ・バントン・スミス



ニラ・バントン・スミス (Nila Banton Smith) は、グラスボロー州立大学の著名な教授であり、読み方の早期教育に関する諸見解、特にそこによせられるような圧力や問題提起について論じ、研究的な見解を支持している。これは、アンアーバーのミシガン大学で行なわれたミシガン教育協議会における講演の要約である。

## ◆事実と究想

スプートニクの上昇は、アメリカをかつてないほどに驚かせ動揺させた。アメリカ合衆国の優越性が、いまや他の国の技術的成功によっておびやかされたのであり、そして、その国は、明らかに世界を共産化しようと志しているのである。私どもは、アメリカ人としてアメリカ人の生活を守ろうとするならば、今までよりもより一層の努力が必要である、という事実、突然そして鋭く、目覚めさせられたのであった。

教育は、そのあらゆる分野で、全身をあげてこの問題を感じと

った。ウィリアム・カー (William Carr) 国立教育協議会、行政長官) は「最初のスプートニクの次にきたものは、教育に対する驚異的な社会的要望であった」といつている。この、教育全般に対する要望の一部として、いまや読み方の教育がこれまでにない重要性をもって論じられる問題となっている。読み方に関係のあるあらゆる面とあらゆる水準において、より多くの成果をあげようとするための圧力が、ただちに感じられはじめた。

しかしながら、読み方の教育に関連のある面でのこの圧力は、幼児に読むことを教えようとする動きの中に、一番はつきりと現

われているように思われる。ある幼稚園では、先生方が、両親からの圧力や、あるいは管理者からの圧力で、その管理者たちは地域の教育委員会や地域社会の意見に次第に影響されてしまったのであるが、それらの圧力を受けた結果、いまや正式に読み方を教えるはじめてのである。両親たちは自分の子どもたちに、むりやりに読み方を教えるようにするし、近刊書は、両親たちにどうしたら赤ちゃんに読み方を教えることができるかを説いている。例えば次のようである。「二歳が教えるはじめての一番ふさわしい時である。しかし、もしもあなた方が、いささかの困難に耐える決意があるなら一八か月からはじめることができ、また、非常に早くから教えるはじめることができるくらいに賢かったとしたら、一〇か月でもよいのである」

何とまあ、幼児たちに読み方を教えるようとして、人々は一体どこまで飛躍しようというのだろう。多分、次に現われる新機軸は、生まれる前に、母親に丸薬を与えておいて、その子どもが生まれながらに読むことができるようにするということであろう。この前の春の教育協議会で講演を行なっている間に、この空想的な可能性が思い起こされたのであった。その時、私は、こんなことは非常に馬鹿げた極みであると考えたが、間もなく、もっと奇妙な実験報告を読むことになった。それは、エドワード・R・シプイ (Edward R. Sipay) によって書かれたもので「読み方学習に<sup>①</sup>

関する胎生期教育の効果」と題されていた。

その研究は、一二年間にわたってなされた。シペイは、四か月の胎児をもった母親たち一十二名について研究を進めた。その母親たちは三つの均等なグループに分けられた。そして、一つのグループは自分たちの胎児に基礎的なリーダーを教えた。一つのグループは、ただ発音の指導だけを行ない、もう一つのグループは、無意味綴りを繰り返すよう要請された。そのレッスンは、テープにふきこまれていて、母親の腹部にとりつけられた特別装置の器械によって、胎児に伝えられた。その子どもたちが六歳になって一年生にはいった時、読み方テストが行なわれ一年から六年まで毎年それが続けられた。胎児期に読み方の教育を受けた子どもたちは、それを受けなかった者よりも、テストでよい成績をあげた。この論文の著者は、次のような意味のことを引用して結論としている。すなわち「読んだものを、何でも、余りにも気早に信じすぎるな」

シペイ博士は、このようにどんどん高まっていく幼児に読み方を教えるようとする傾向が、いかに馬鹿げたものであるかを示そうとして、にせの研究報告をもくろんだのであった。

冗談はもうたくさんだ。さて、今度ははじめに、この問題について、異なった幾つかの面を吟味してみよう。

### ◆さまざまな思いちがい

幼児に正式に読み方を指導せよと、唱える人々は、明らかに読むという行為の性質について、幾分思いちがいをしている。たとえば、その人々は、読む力の成長は他の全体的な成長とは別であるものように考え、更に、おとなが子どもに読むことを教えようと決定しさえすれば、いつでもその時にとり出して、左右することのできる独立の学習要素のように考えているらしい。

実際、その領域の科学的な研究をよく知っている人々は、読み方は、子どもの全体的な成長の中にあつて、分かちがたい一部分であるということを認めている。多くの研究が、読む力の成熟は、身体的な成長、心的な成長、情緒的・社会的な成熟、および経験的な背景と言語の発達に伴うものだ、ということ明らかにしている。これらの統計的な資料に照らして、幼児教育の専門家たちは次のように問うのである。すなわち「私たちは、なぜ、他のもっと基本的なさまざまな面の成長に先んじて、むりに読む力を成長させようとするのだろうか？」と。

今一つの誤った考え方として、読み方の過程を余りにも単純な概念でとらえようとするものがある。ある人々は、一人の子どもが、紙に印刷された一つのことばを声を出していえると、もうその子どもが文字を読んでいるのだと思ってしまうようである。最も普通に用いられる方法は、子どもにアルファベットを覚えさせ

たり、単語の書いてあるカードをひらつかせてみせたりすることである。また、子どもに発音を教えたり、音声学的なことばを分析して、そのことばを子どもに発音しやすくしてやつたりもする。

ある日のこと、一人の非常に知的で、感受性も鋭い若い父親が、私に次のようなことを語った。「私の四歳になる息子は、テレビの二つのことばがわかつている。しかし、私たちは、その子が読めるということはできない。テレビに出てくることばを一つや二ついえることが、読めるということではないから」その父親は、何と正しいことであろうか。そして、他の若い父母たちが、単にことばを声に出していえるのが、読むという行為ではない、ということに気づかないのは、何と気の毒なことであろう。

それから、読み方の不可欠の条件である意味の獲得ということがある。私のよく知っているものでは、幼児に読むことを教えようとする報告の中で、子どもに読んでいるものの意味を考えさせるように教育することに、注目して論じているものはないのである。一方、新しい<sup>⑨</sup>多くの研究が、三歳の幼児たちは起きている間中、そのほとんどの時間を思考していること、そして、私たちの多くが推測しているよりもずっと高度な知的な過程によって考えられていることを、指摘している。幼児たちは、思考能力を持っているのだから、おとなの判断だけで、単なることばの記憶という

ような、きまりきった訓練のために、子どもたちの時間を費やしてよいだろうか？

更に今一つの思いちがいは、個人差の無視である。ある人々は、たとえば、二歳児はすべて読み方学習に耐え得る、とか、あるいはは四歳児、あるいは幼稚園児は、全員読むことを学び得るのか、そんなようなことを想像する。ある子どもは、確かにそれができるだろう。しかし、ある子どもは、できないのである。

早い時期から文字を読むことができるようになる子どもたちについて研究した人々には、こういう子どもたちの特性について、かなり一致した見解を示している。これらの特性として私どもは、次のようなものを見出すことができる。すなわち、

……このように早くから読めるようになる子どもたちは、知的にすぐれていて、父親は聖職であったり、専門的な地位にいる者が多く、読むことに関係のある活動を刺激されたり、奨励されたりする機会の多い家庭で生活している……

不幸なことには、アメリカの子どもたちの大部分が、これらの特性をもっているのではない。そこには著しい個人差があるのであって、就学前の幼児全体に読み方の学習を行なおうという人々は、この非常に重要な点を考え忘れていたのである。

◆早くから読み方を教えておくと、長じて後により高

度な成果をあげさせ得るであろうか？

幼児に読み方を教えようとする人々の、主な論点は次のようである。すなわち、早くから読み方に熟練させておくならば、その子どもたちが学校にはいつてからの学業に幸いするであろう、ということなのである。この論議は、果たして、どのくらいの合理性をもっているであろうか？

正式の読み方の教育が、すべての子どもにとって学校で開始されているということの結果を、ちょっとふり返ってみよう。最初に、歴史は私どもに、一つの物語を告げてくれる。一八〇〇年代の中頃から今世紀の四半分に至るまで、子どもたちは六歳で小学校に入学させられ、入学した最初の日から正式な読み方教育がはじめられていた。

しかしながら、一九一五年から一九三五年の間に、おびただしい量の教育研究の文献が、最初の学年における落伍者の極めて多いことを指摘した。研究者たちは、一年生の二〇パーセントから四〇パーセントの子どもが落伍しているということを見出した。

このような落伍の原因は、読む力の欠如であった。これらの重要な統計の結果として、読み方のレディネスという概念が紹介された。そして、先生方には、ある種の子どもたちに対して正式の読み方を教えるのを延期するように、助言が与えられた。その子どもたちは、この読み方という複雑な技能をじょうずにこなせるだ

けの準備が整うまで、延期させられるのである。

六歳で一年生に入学して、正式に読み方を教わった子どもたちの中に、そんなにも多くの落伍者がいるとしたら、五歳児や、もっと小さい幼稚園児たちに、正式に読み方を教えるとしたら、一体どんなことが起こるだろうか？

もっと新しい研究は、その上に、読み方の早期教育について、その効果が持続するか否かという点に関して、のり多いものをもっている。これらの幾つかを手短かに述べてみよう。

⑥ ケイスター (Kestner) は、五歳児は、正常な程度に一年生をやりとおせるだけの、十分な読み方の技能を身につけることができる、といっている。しかし、こんなにも発達した技能が永久性を欠いていて、一年と二年の間の夏に、消失してしまう傾向があるということを見出している。

⑦ ミシガンのグルースポイントにおいて、心理学者たちは、幼稚園生活に十分に耐えられるまでに成熟した子どもたちを選び出し、五歳にならないうちに入園させた。一四年後に、こうして早期入園を許可された子どもたちの中でまだ学校教育を受けている者について、その学業成績が研究された。その結果、次のようなことがらが見出された。すなわち、これらの子どもたち、つまり十分に成熟していて早期入園が可能であったために、早期入園者として選出された子どもたちのうち、約4/5 (二五・三パーセン

ト) が平均よりも下位であったり、同じ学年をくり返したりしていた。

⑧ ロッチェ (Roche) の研究は、次のような結果を証明する。すなわち、読み方に対してまだ準備のできていない子どもたちは、正式に読み方の教育を受けるための準備ができあがるまでは、レディネスの段階においた方が、より多くの成果をあげることができる、というのである。そして、子どもたちにとってそのような役目を果たす一定期間、つまりレディネスの期間を与えて後に、はじめて正式に読み方学習をはじめさせるならば、長じて後の学業の進歩を遅退させることはないであろう。

幾つかの新しい研究は、特別に早く一年に入学したり、あるいは特におくれている子どもたちについて、三、四、五、六の各学年での成績を比較している。普通は、一年生で正式の読み方の教育がはじめられる。そこで、一年生を早くスタートした子どもたち、あるいはおそくスタートした子どもたちの、高学年での学業の結果を知ることが、この論争にとって極めて当を得たものである。

⑨ キャロル (Carroll) は、一年生を早くスタートした者とおそくスタートした者の、三年生になった時の読み方の成績を比較した。ハリウェル (Halliwell) とステイン (Stein) は、四年と五年の子どもたちについて同じ研究をし、ハンプルマン (Hampelman)

は、六年になった子どもたちについて、同じ性質の研究をした。これらの研究者たちはすべて、早く入学した者はおそく入学した者よりも、成績が悪い、という有意性をもった結論を導き出している。

このように、有用な研究の多くが、子どもたちに早くから読み方教育をはじめたからといって、学業のプラスにはならない、ということを示しているのである。

### ◆貨幣を裏返して

さあ、今度は貨幣を裏返してみよう。つまり、逆の場合をも考えてみよう。今までのところ、私は、幼児の群について論じ、おとなのイニシアティブによって行なわれる指導を受けさせられる子どもたちのことを論じてきた。しかし、自分から読み方を学ぼうとする幼児たちも存在するのである。これは、私が、これまで論じてきたものとは、全く異なった事態である。

ターマン (Terman) は天才児を研究して、これらの天才児の多くが、非常に早くから読めるようになる、ということを発見した。あなた方は、その天才児たちはほとんどが、ただちょっとした付随的な助力をおとなから受けるだけであって、全く自分自身の要求で読めるようになったということを、思い出すであろう。

ある子どもは、両親が全然気づかない間に、読むことができるよ

うになっていて、突然のように読んでみせて親たちを驚かせたりするのである。

個人的な経験の引用であるが、私は、キャッシュという若い友人の娘のことを話してみよう。

キャッシュが三歳の時、私はよく他の客と一緒に彼女の家で夜を過ごした。客が到着すると、キャッシュは半ダースほどの本をかかえて電灯の下にひとりですわりこみ、客のおしゃべりなどすっかり忘れて、長い時間、自分の本を、文字通りむさぼるようになっていた。

四歳になった時、キャッシュは幾つかのことばについて、これは何かとたずねはじめた。そして、今度は、そばにすわりこんで声を上げて本を読んで聞かせるようになった。ほとんどは記憶に頼ってであるが、あちこちのある単語は、識別することができた。四歳半の時、ある日のこと、母親が彼女を十円ストアーに連れていった。その時、彼女は絵入りの小さいバンフレットをみつけて、それを買ってくれと頼んだ。その絵には、各々にひとつずつ単語が書かれていたのである。この本を用いて、キャッシュは読み方を自分で勉強しはじめた。そして、この前の秋、五歳で幼稚園にはいった時には、もうすらすらと読めるようになっていた。

キャッシュがこんなにまで熟練しているのを、幼稚園の先生が

気づいているかどうか知りたいと思って、私は「先生はあなたに読ませてくれますか？」とたずねてみた。キャシイは「ええ、毎日私は先生に読んで聞かせてあげています。時には、他の子どもたちにも読んであげます」と答えた。そこで私は、幼稚園の先生が子どもたち全部に、実際に読み方を教えているのならそれを知りたいと思って、もう一度たずねてみた。「先生は、みんなの子どもに、毎日読ませますのですか?」「いえ、私ともう一人の女の子だけよ。でも私はその子より、ずっとよく読めますけど」とキャシイは答えた。

キャシイは、単に読む力が進んでいただけでなく、評価のしかたまで身につけていて、それを用いて読み方の能力を評価していたのであった。しかも、全く無邪気に無遠慮に、それを用いていたのであった。

私が、この実例を用いて指摘しようとしたのは、次のようなことである。(1) キャシイは、自分自身で疑問を抱いたり、要求が起こったりした結果、読むことを学びはじめた。そして、その疑問や要求が優しくよく気のつく母親によって、こたえられ受け入れられたのであった。彼女は、誰か大人が彼女に読み方を教えようと決めたために、読めるようになったのでもなく、彼女に記憶するようにと単語カードをひらつかせた人もなく、また、bは“buh”

cは“chh”などと発音練習をさせたためでもなかった。彼女は、実際のところ、自分ひとりで全部の単語を読むことを学んだのであり、それらの単語は、絵にかかれていたために彼女にとって意味深く思われたのであった。(2) キャシイは、幼稚園においても、拒否されずに文字を読むという経験をさせて貰えた。そして、そのようなことは一年生になるまで待つべきだ、ともいわれなかった。幼稚園の先生は、キャシイの読み方に対する興味と能力を助長してくれた。しかし、先生は決して、キャシイにも他の園児たちにも、その園児たちは、まだ読みは始めるだけの成熟度に達していなかったのであるが、それらの子どもたちにも正式に読むことを教えはしなかった。

今日、幼児たちの多くが、早熟になっている。幾つかの研究が、五〇名に一人の割合で、幼稚園にはいつてくる子どもが文字を読めるようになっていて、ということを示している。これらの子どもたちには、求めた時にはいつでも助力が得られ、読みたいと思った時にはしばしば耳を傾けて貰えた、ということが認められるであろう。アメリカは、天才たちの貢献を待ちこがれているのだから、準備のできあがった子どもたちを無視したり、読み方の技能を身につけようとして重要な助けを求めている子どもたちを見落としたりは、決してしないのである。

私は、幼稚園の先生方の多くが、現在、読み方の成長に関係の

ある領域で行なっていることよりも、それは正式な読み方の教育

ではなく、形にはまらない機能的な意味での読み方教育であるが、もっとたくさんの方ができると思っている。幼稚園時代全体にわたり、一年生にはいるまでに何らかの準備を必要としているこの期間を通じて、先生は、折にふれては、子どもたちに自分たちの使っていることばが、シンボルとして印づけられるということを見せるべきであろう。それは、先生が黒板や掲示板に文字を書きつけていく時に起こる経験である。子どもたちが見つめている中で、クラスルームの経験や興味や要求などから生じてくる注意とか計画、指示などを書きつけていく時、そのあらゆる機会から利益が得られるはずである。子どもたちがまだ単語やフレーズや文章を読むように要求されない間に、彼らは次のような価値の高い経験をするようになるであろう。つまり、意味が、読むことのできるシンボルに置き換えられるのを見る、という極めて価値ある経験をするのである。

もしも、ある子どもが、幾つかの単語を選び出して、それを自分の意志で読もうとしはじめたならば、その子どもは、その特権を拒否されることなく、賞められ奨励されねばならない。その現われを全然みせない者に関しては、先生は、現われたものだけで満足すべきである。究極的には、幼稚園かあるいはもっと後の一年生かで、その子どもたちの読む力が成熟してくるにつれて、や

りは始めるにちがいないのである。

私は、平均あるいはそれ以下の知的水準の子どもたちに読み方を教えることは、それを圧迫することになると論じ、すぐれた能力の子どもたちはそれなりに認めてやるが必要であると、論じている。すぐれた子どもとは、幼稚園にはいってくる時、すでに読むことができるようになっていく子どものことである。

チャールス五世がその晩年に、次のようなことを発見して以来、四世紀が流れている。すなわち、彼は自分の時計のコレクションが、決して同じ時をきちんと指し示すことができない、という事実に気づいたのであった。今日、多くのしろうとたちや、幾人かの著作家や、そして幾人かの先生方さえもが、幼児に読み方を教えることについてさまざまに論争している。それは、あたかも、子どもたちが自動機械であって、私どもがねじを巻こうとか、動かしはじめようとか思えばいいとしても、それにこたえて、チクタクと動き出すもののようにみなして、論じているように思われる。

私どもが、個人差を尊重することを学ぶのは、一体いつなのであろうか？ 一定の年齢で、子どもたち全員に何かを教えようという集団活動は、いかに現代の教育哲学、心理学、あるいは教育



研究の成果に反していることだろう。何人かの恵まれた環境にある頭のいい子どもは、非常に早い時期から読みたがって騒ぐかもしれない。もしそうだったら、その子どもたちには、彼らの求める助力を与えてはならないという理由がない。そして、他の子どもたち、つまり読み方に対してはつきりした興味をまだ示しはじめない子どもたちは、七歳になるまで読む力が成熟しないのである。現在、私どもは、次のような事実を証明してくれるたぐいさんの証拠をもっている。すなわち、有機体の準備が整わないうちに、その子どもたちにむりに読み方を教えてみても、長い将来においては決して利益ではないということ、そしてむしろ有害な結果を招きやすくなることなのである。

## 文 献

- ① H. L. Caswell, "Non-Promotion in the Elementary School," *Elementary School Journal*, 1(October 1933), 644-47.
- ② Marian Carroll, "Academic Achievement and Adjustment of Underage and Overage Third-Graders," *The Journal of Educational Research* (February 1964), 290.
- ③ Joseph W. Halliwell, and Belle W. Stein, "Achievement of Early and Late School Starters," *Elementary English* (October 1964), 631-39.
- ④ Richard S. Hampleman, "A Study of the Reading Achievements of Early and Late School Starters," *Elementary English* (May 1959),

331-34.

- ⑤ A. O. Heck, *Admission of Pupil Personnel* (Boston: Ginn & Co.).
- ⑥ B. U. Keister, "Reading Skills Acquired by Five-Year-Old Children," *Elementary School Journal*, XII (April 1941), 587-96.
- ⑦ Paul E. Mawhinney, "We Gave Up on Early Entrance," *Michigan Education Journal* (May 1964), 25.
- ⑧ Gus P. Plessas and Clifton R. Oakes, "Pre-Reading Experience of Selected Early Readers," *The Reading Teacher* (January 1964), 245. Reprinted with permission of authors and International Reading Association.
- ⑨ Mary Mand Reed, *An Investigation of Practice for the Admission of Children and the Promotion of Children from First Grade*, Doctoral Dissertation (New York: Teachers College, Columbia University, 1927).
- ⑩ Helen Roche, "Junior Primary in the Van Dyke Level Plan," *Journal of Educational Research*, LV (February 1962), 232-33.
- ⑪ Edward R. Sipay, "The Effect of Prenatal Instruction on Reading Achievement," *Elementary English*, Vol. XXXXII (April 1965), 431-32.
- ⑫ Lewis M. Terman, *Genetic Studies of Genius* (Stanford, Calif.: Stanford University Press), Vol. I (1925), 271-72; Vol. II (1926), 247-55.
- ⑬ Kenneth Wann, from reports of research conducted by Kenneth Wann and associates (New York: Teachers College, Columbia University).
- ⑭ W. W. Wright, "Reading Readiness: A Prognostic Study," *Indiana University Bulletin*, XII (Bloomington, Ind.: Indiana University, 1936).

(十文字学園短期大学・本田和子訳)